

編集
林 鈴木
巨 一
樹 彦

協編
力集

中 猿 飯
山 田 田
緑 知 晴
朗 之 巳

用言編(二)
形容詞
形容詞
容動詞

研究資料日本文法③

明治書院

編 者

鈴木 一彦 (すずき かずひこ)

林 巨樹 (はやし おおき)

研究資料日本文法

第3巻 用言編(二)

形容詞
形容動詞

創業88周年記念
特別定価 2,800円

昭和59年10月25日 初版発行

東京都千代田区神田錦町 1-16

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹 彰

長野県長野市中御所2-30

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田中 忠

発行所 株式会社 明治書院

〒101 東京都千代田区神田錦町 1-16

電話 東京 (292) 3741 (代)

振替口座 東京 3-4991

© K. Suzuki 1984 3381-26603-8305 製本 星共社

編集にあたって

言語に対する見方、言語観の相違が文法観の相違を生む。また、対象とする言語の違いによっておのずからそれに対する文法論上の処理も異なってくる。

江戸時代以前、日本の研究者は、日本語の本質を踏まえながら、それなりの文法体系を作り上げてきた。一方、十六世紀以来、西洋人の手によって、西洋文法の立場から日本語に対する文法的処理を行うといういくつかの成果が生まれ、それに従う日本人の学者の業績もあった。

右のような伝統的文法観、西洋文典の体系に基づいて整理された日本文典、両者の折衷によって作り上げられた文法理論など、さまざまなものの上に立って、明治以後、大槻文法・山田文法・松下文法・橋本文法・時枝文法などと称されるものをはじめとして、多くの文法学説が提示されて今日に至っている。

今回刊行される『研究資料日本文法』全十巻は、以上のような過去の文法学説をふり返りながら、語論・構文論・敬語論・修辭論など広い分野にわたって、新しい視点から、それぞれの論を展開することを一つの目的としている。外国語・方言の分野からの論考を加えたのも、広い視野から日本語を見直そうという立場によるものである。また、「研究資料」という見地から、文法に関する過去の資料のうち基本的なものを選んで、それに対する解説を付し、可能な限りの注解を施して読者の便を計った。加えて、文法上問題となる諸事象について新しく調査収集、整理したものを収載した。これは、これからの国語教育に役立つことをも企図している。さらに、各

巻の巻末には、これからの文法研究に資するために、それぞれの分野における基本的参考文献を出来る限り一覧し得るよう収載することにとめた。

全巻を貫いている一つの考えは、文法学説史の整理という点にある。学説史を辿ることによって、文法について今日どのようなことを問題にすべきか、どのような研究課題があるかを知ることが出来ると思うからである。

十年ほど前に刊行された『品詞別日本文法講座』は語論を中心とした論考が主なものであり、資料編も生のままを提示するにとどまっていた。これを拡大充実し、前述の趣旨によって企画したのが今回の十巻である。

読者が、文法知識を整理し、みずからの目で対象としての日本語を見つめて、文法はこうあるべきだと悟る、そのために本書の論考および資料は資するところ大であろう。また、そのような観点で活用されることを願ってやまない。

鈴木 一彦
林 巨樹

執筆者紹介

①生年月日 ②卒業校 ③専攻 ④現在

山本 稔(やまもと みのもる) ①昭和4年2月11日 ②滋賀師範学校 ③国語科教育 ④山梨大学助教授

山崎 肇(やまざき かおる) ①昭和2年4月20日 ②東京大学文学部 ③万葉集・上代日本語 ④神戸大学教授

山口 佳紀(やまぐち よしのり) ①昭和15年11月14日 ②東京大学大学院 ③日本語史 ④聖心女子大学教授

飯田 晴巳(いいた はるみ) ①昭和21年6月30日 ②青山学院大学大学院 ③国語学 ④青山学院大学講師

櫻井 光昭(さくらい みつあき) ①昭和4年10月17日 ②早稲田大学大学院 ③国語学 ④早稲田大学教育学部教授

小島 俊夫(こじま としお) ①大正15年6月3日 ②東京文理科大学 ③国語学 ④山形大学教授

日野 資純(ひの すけずみ) ①大正15年1月1日 ②東京大学文学部 ③国語学 ④静岡大学人文学部教授

日向 茂男(ひなた しげお) ①昭和18年6月20日 ②オーストラリア・モナッシュ大学大学院 ③日本語教育 ④国立国語研究所日本語教育センター

中山 緑朗(なかやま ろくろう) ①昭和22年6月6日 ②立教大学大学院 ③国語学 ④昭和女子大学短期大学部国文学科助教授

研究資料日本文法

全10巻

編集 鈴木一彦・林 巨樹

創業八十八周年記念出版

特別定価 各二八〇〇円

過去の文法學說をふり返りつつ、
語論・構文論・敬語論・修辭論等、
各分野にわたって新しい視点から
問い直す新シリーズ。過去の重要
な基本資料も注解して紹介したほ
か、文法上の諸問題を提示説明。

好評配本中

全10巻の構成(毎月一冊配本)

▼内容見本呈

① 品詞論・
体言編 名 詞 第8回
代 名 詞 配本

② 用言編(一) 動 詞 発売ノ

③ 用言編(二) 形容動詞 発売ノ

④ 修飾句・
独立句編 副詞・連体詞 発売ノ
接統詞・感動詞

⑤ 助辞編(一) 助 詞 発売ノ

⑥ 助辞編(二) 助 動 詞 発売ノ

⑦ 助辞編(三) 助 動 詞 辞典 第10回
助動詞 配本

⑧ 構 文 編 発売ノ

⑨ 敬 語 編 発売ノ

⑩ 修 辞 法 編 第9回
配本

A5判 平均三三〇頁 箱入

明 治 書 院

目 次

1 形容詞とは何か

山崎 馨 1

一 前置き

..... 2

二 名詞系形容詞

..... 4

三 いまも残る疑念

..... 10

四 動詞系形容詞

..... 11

五 時枝文法との関係

..... 16

2 形容詞の活用

山口 佳 紀 19

はじめに

..... 20

一 ク活用とシク活用

..... 21

二 本活用と補助活用——連体形・終止形の場合

..... 24

三 本活用と補助活用——已然形の場合

..... 30

四 本活用と補助活用——未然形の場合

..... 34

五 修飾語性と述語性

..... 36

六 終止形の成立

..... 42

おわりに

45

3 形容詞研究の歴史

飯田晴巳

47

一 はじめに

48

国語学史と本論考の立場
形容詞研究史の問題点と本論考の方法
形容詞研究史の時代区分

二 第一期 上代・中古の形容詞認識

53

この期の特色と本論考の立場
書きにみられる形容詞認識
歌学書における形容詞認識
国語研究の萌芽と形容詞認識
訓注・音義・悉曇学における形容詞認識
宣命

三 第二期 中世の形容詞認識

58

この期の特色と本論考の立場
ける形容詞認識
連歌論における形容詞認識
活用の自覚と形容詞
の活用
ロドリゲス『日本大文典』における形容詞認識
歌学における形容詞認識
辞書にお

四 第三期 近世の形容詞認識

84

この期の特長と本論考の立場
の形容詞認識
鈴木胤の形容詞認識
東条義門の形容詞認識
富
樫広蔭の形容詞認識
権田直助の形容詞認識
幕末の形容詞研究
富士谷成章の形容詞認識
本居宣長

五 第四期 近代の形容詞認識

103

この期の特色
「形容詞」の確立

4 形容詞の諸問題

櫻井光昭 109

前書き

110

一 形容詞の設定

形容詞は品詞として認められるか 形容詞の範囲は広い

110

二 形容詞の活用と活用形

活用と活用形の問題点

119

三 形容詞の後発性

形容詞の後発性

137

5 形容動詞とは何か

小島俊夫 147

一 はじめに

148

二 形容動詞を設定する考え方

151

三 形容動詞を設定しない考え方

160

四 設定する・しない、その考え方の比較検討

168

五 むすび

182

6 方言の形容語

日野資純 189

一 はじめに

190

二	方言文法の記述法	191
三	方言の形容語の記述例	193
	神奈川・青森両方言の形容語の実例	204
	青森方言の形容詞	213
四	変化詞としての名詞、冠詞、形容詞	222
五	限定詞	227
六	名詞による修飾	232
七	形容詞	235
八	外国語の形容語——ポルトガル語の場合を中心にして	217
九	形容する語、形容される語	218
一〇	修飾、形容、限定	220
一一	実質語、名詞、形容詞	222
一二	冠詞	227
一三	限定詞	229
一四	名詞による修飾	232
一五	形容詞	235

7

外国語の形容語

——ポルトガル語の場合を中心にして

日向茂男

217

一 形容する語、形容される語

218

二 修飾、形容、限定

220

三 実質語、名詞、形容詞

222

四 変化詞としての名詞、冠詞、形容詞

224

五 冠詞

227

六 限定詞

229

七 名詞による修飾

232

八 形容詞

235

資料Ⅰ	近世以前の形容詞・形容動詞研究書抄	〔中山緑朗〕	244
	ロドリゲス日本大文典 一步 三集類韻 活用言の冊子 詞つかひ (詞の小車) 詞通路 山口栞 形状言五種活用図 ことばのちかみ ち(詞捷徑)		
資料Ⅱ	可能動詞の実態——話しことばにおける可能表現の場合	〔山本 稔〕	303
資料Ⅲ	形容詞・形容動詞関係研究文献一覧	〔中山緑朗〕	337

1

形容詞とは何か

山

崎

馨

一 前置き

日本語において形容詞と呼ばれる品詞を、初めて体系的に位置づけた研究は、富士谷成章（一七三八～一七七九）の『あゆひ抄』であった。そこでは語を次のように分類し、

名（名詞）

挿頭（代名詞・副詞・接統詞・連体詞・感動詞など）

装（動詞・形容詞・形容動詞など）

脚結（助詞・助動詞・接尾語など）

さらに「装」を分類した「装まといのかたち 図」によれば

事（ラ変・ナ変・下一段以外の動詞）

孔（ラ変動詞）

在（ナリ活用形容動詞）

芝（ク活用形容詞）

鋪（シク活用形容詞）

としている。このように、西洋文典の影響を受ける前に、日本語にはのちに形容詞と呼ばれる一群の語があること、それが活用形式において二種に分れていること、それが機能的に動詞・形容動詞と共通する面を持つことなどが、すでに明確に認識されていたのであった。例えば、形容詞と動詞とに共通する機能としては、

単独で述語になることができる。

単独で連体修飾語になることができる。

その連体形に体言相当の資格がある。

などのことが見られる。

世はさだめなきこそいみじけれ。命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。……住みはてぬ世に、みにくき姿を待ちえて何かはせむ。(徒然草・第七段)

これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関(後撰集・一〇九〇)

明治時代に及んで諸事万端を西洋に学ぶ風潮が世に溢れ、日本語の文法における品詞分類もまたその例外ではなかった。すなわち、形容詞は名詞を修飾する語として、英文典の *adjective* に対置されたのである。それはのちに修正されて、日本語の「形容詞(又ハ形状言)ハ事物ノ状態、性質、情意等ヲ形容シテイフ語」(大槻文彦『語法指南』)と定義されたが、いまでも日本語の形容詞を指して、英語では *adjective* と言うほかはないので、両者の関係が等質的であると誤解される恐れも、社会一般において皆無とは言えない。

形容詞が単独で連体修飾語として機能することは、日本語にも英語にも見られる。

若き人々よ、高き志を抱け。

There are beautiful flowers in the old garden.

しかし、日本語の形容詞が、単独で、すなわち他の品詞の助けを借りずに、述語になることができるのに対して、英語における形容詞は、述語としては常に *be* 動詞と共に用いられて、単独には用いられない。

庭は古く、花は美し。

Boys, be ambitious!

また、日本語の形容詞が連用修飾語として機能すること、連用形に副詞法が見られるのに対して、英語における形容

詞にはその機能が認められない。こうして、形容詞の機能という点について比較すれば、日本語は英語よりも幅が広いと言うことができる。

二 名詞系形容詞

前置きとして形容詞の語性について一言したが、以下与えられた標題に沿って本論に移る。日本語において形容詞とは何かという問いに対しては、例えば意味論の立場から答えたり、構文論の立場から答えたりする、さまざまな答え方があるのである。しかし、それらはいずれも十全な答えではなく、端的に形容詞の本質をとらえることにはならないように思われる。結局のところ、形容詞とは何かと問うことは、形容詞の本質とは何かと問うことであろう。また、結局のところ、形容詞の本質を探ることは、形容詞の原初的形態、形容詞の成立の様相を探ることにほかならないのである。

日本語においては、形容詞という品詞の発達は比較的小さく、また不十分であったようで、例えば、八世紀の散文資料たる『続日本紀』の宣命（天平十八年四月の『元興寺縁起』所載の宣命、天平勝宝九年三月の『正倉院文書』所載の宣命を加える）における形容詞は、わたくしの調査によれば、延語数四九八語（その約四割はク活用をする六語、あかし、かしこし、きよし、たひらけし、なし、よし、によって占められる）、実語数八八語であって、いわゆる形容動詞は、このような形容詞の貧しさを補うものであった。しかし、古代日本語における形容詞は、貧しくとも、とにかく一つの語群としてとらえることができるのであり、その成立の様相を探ることが結局は形容詞とは何かという問いに対して、最も直接に答えることになるはずである。

古代日本語における形容詞を観察すると、そこには活用上の差違、すなわち、ク活用をする形容詞群とシク活用を

する形容詞群との区別が、すでに明らかである。この区別は、形容詞が発達する途中の段階において生じたと考えるべき根拠が見あたらず、形容詞が発生した頭初からの区別であったと考えるほかはない（服部四郎氏『日本語の系統』三六一頁）。これは形容詞の発生が一元的ではなく二元的事であったことを物語るものであり、日本語における形容詞の二元的事発生を示唆する差違として、極めて重要であると考えられるのである。例えば、ク活用形容詞の例として前掲の六例を見ると、

あかし（明）

かしこし（威・畏・恐）

きよし（浄・清）

たひらけし（平）

なし（無・无）

よし（善・能・好・嘉）

その語幹に相当する部分——あか・かしこ・きよ・たひらけ・な・よ——は、いずれも事物の状態を示す語、形状言であり、また、広い意味で名詞とすることができる語である。これらの語幹部は形状的体言と呼ぶべき一種の名詞であり、それにク、シ（指定の意）、キなどの語尾が膠着して、のちにク活用と名づけられる語尾変化をする語として発達したのである。すなわち、ク活用形容詞が名詞から派生した語であることは動かしがたく、これを名詞系形容詞と呼ぶことができる。前掲の六例のうち、あかし・かしこし・きよし・なし・よし、などの一群を、わたくしは名詞系形容詞A群と呼んでいるが、これに対して「たひらけし」は、かそけし・さやけし・はるけし・ゆたけし、などと同類の語群に属すべきものと考え、これを名詞系形容詞B群と名づけた。このA群とB群との相違は、A群の語幹が安定度の高い——それ自身がそのまま動詞の語幹になったり、複合名詞の前項になったりする——形状的体言であつ